

北総と近隣の百庚申～多数建立の意図を探る～

蕨 由美（房総石造文化財研究会会員）

江戸時代は、前期の寛文・延宝期から、関東の村々、船橋市内をはじめ、北総（下総地方）では庶民の石塔建立が盛んになり、特に庚申塔が多く建てられ、庚申塚では、数基以上の庚申塔が並ぶ風景も見られます。

今回は、薬円台に近い前原東5丁目の庚申塚に建ち並ぶ「百庚申」と、北総に特有な多石型の「百庚申」を紹介し、そして「百庚申」が建てられた意図とその背景を探っていききたいと思います。

1. 船橋近辺の庚申塔の成立とその変遷

庚申塔は、最も普遍的で数も多く、近世からの村落共同体建立の石塔を代表する石造物です。

庚申待は、六十日に一回庚申の夜に、眠った人間の体から三尸が抜け出し天帝にその人の罪過を告げられないよう徹夜するという道教に由来した信仰で、室町時代ごろから庶民にも浸透して庚申講が行われるようになると、その供養の証しとして「庚申塔」（庚申供養塔）を建立する風習が、江戸時代に、各地に定着しました。

近世庚申塔の関東における初出は、元和9年（1623）の足立区正覚院の弥陀三尊来迎塔と三郷市常楽寺の山王廿一社文字塔、千葉県最古は松戸市幸谷観音境内の寛永2年（1625）の山王廿一社文字塔で、下総地域への伝播は、江戸川に接する東葛地域からと推定されます。

船橋市域では、寛文4年（1664）銘の三猿が刻まれた板碑型塔が鈴見町に、葛飾本郷路傍には寛文10年（1670）銘の薬師如来像塔が建てられるなど、1660年代から三猿や諸仏の彫像、文字のみの供養塔などいろいろな形態の庚申塔が普及していきます。

青面金剛像を主尊に彫った庚申塔が現れるのは、北総では、寛文11年（1671）銘の印西市小林の砂田庚申堂の四臂の青面金剛像塔からで、その後は船橋近辺でも、六臂の凝った青面金剛像の庚申塔が建てられていきますが、江戸中期終わりの寛政期（1790年代）のころから、北総の庚申塔は、青面金剛像塔から再び三猿付文字塔に替わり、後期前半は「青面金剛」の主尊名、文政期頃からは「庚申塔」銘の文字塔となります。

2. 前原東五丁目の百庚申の風景

前原東五丁目の郵便局前の庚申塚には、享保18年（1733）など青面金剛像塔3基と文字庚申塔2基の前に、細長い駒型の「庚申塔」銘の文字塔70基と残欠数基が前後四列に並べられて、不思議な風景となっています。ここは、成田街道からは、御成街道を横切って久々田村に通じる幹道の入口に近い場所です。

（今回はその内容については、実際に調査されておられる大塚武彦氏にご紹介いただきます。）

3. 北総の「百庚申」探訪 —多彩なその姿—

北総の庚申塔で特異なのは、江戸後期から近代にかけて建立された「百庚申」です。

百庚申は、一石に「百庚申」銘や「庚申」などの文字を多数刻んだ「一石百庚申」と、百基または多数の庚申塔を一か所に造立する「多石百庚申」があり、その目的は祈願のための供養は数多い方が有効との「数量信仰」に基づくといわれます。・石材産出のない北総では、「イシダテ」行事や八十八箇所ミニ霊場など、多塔建立が尊重される

多石百庚申は、筆者の調査では、千葉県内に41例（表1）あり、この中で、多石百庚申の先駆けとなるのは、文政12年（1829）の印西市松虫の百庚申で、青面金剛像塔100基を一時に建立し、灯籠一対も奉養しています。（現在は都市開発で、松虫寺近隣の路傍2か所に分けて移動されています）

続いて柏市域など利根川流域で、天保期から幕末にかけて、数多く建立されますが、像塔の割合は文字塔に比べて少なくなり、やや大きめの像塔10基と定形の文字塔90基がセットの百庚申が主流となります。天保年間に建立された鎌ヶ谷市大仏の八幡神社の百庚申、印西市武西と同市浦部の百庚申はこのパターンで、文字9基おきに像塔1基を配置する建立当時の姿を今もよく伝えており、それぞれ各市の指定文化財になっています。

すべて文字塔という多石百庚申も野田市や流山、松戸市の江戸川流域にみられ、流山市鱸ヶ崎の東福寺の百庚申は、句碑などによく使用される板石状の自然石に「庚申」と刻んだ風雅な塔、また前原東五丁目の百庚申も、文字塔のみの百庚申です。

百庚申の中央に中尊を配置する事例は、松虫のように百庚申建立以前の庚申塔を置く場合と、武西のように建立以後も百庚申を信仰して追加される場合があります。

石塔群の形態は、定形の駒型石塔を列状に配置する事例のほか、利根川下流域の東庄町域や匝瑳市域では、丸く細長い枕状の飯岡石自然石に「庚申」と刻んで多数集積する形態の百庚申が多いという地域ならではの特異性があり、匝瑳市大浦路傍の百庚申は、元文二年銘の笠付角柱型の青面金剛塔の下の周りに、このような飯岡石製の「庚申」銘の石塔を多数隙間なく立てています。

地域的には、東総から利根川流域と、野田から南下する江戸川流域に多く分布する一方、内陸の八千代市・白井市と東京湾岸の千葉市・市川市では、悉皆調査によっても多石百庚申の報告例はありません。

また、幕末から明治にかけても、百庚申の造塔事業は行われており、筆者が調査した印西市笠神の笠神社の百庚申は慶應期（1865～7）、同じく笠神の蘇羽鷹神社の百庚申は明治16年～昭和10年（1883～1935）の造営です。

☆印西市笠神の笠神社（かさのみしゃ）の百庚申

旧本埜村の「笠神様」とよばれる神社境内には、左右二列に、幕末期に立てられた「百庚申」の石塔が立ち並んでいて、調べてみると、慶應元年～3年（1865～7）の三年間の建立、青面金剛像塔17基、「庚申塔」銘文字塔78基、計95基。大きさは、像塔が高さ60cm前後、文字塔が48cm前後で、いずれも駒型です。青面金剛像の像容は、剣とショケラを持つ六臂像で、頭部が天を衝くようにとがっていて、この像容は、同時期に近くの栄町上町に建立された百庚申の青面金剛像によく似ています。また足元の邪鬼は、石工の個性がよく出ていて、その正面を向く姿はとてもユーモラスです。

また損傷した石塔数基分が右側の列の後ろに寄せ集められてあり、数えると像塔1基と文字塔4基の計5基分あり、これを復元すれば元は像塔18基、文字塔82基の計100基となり、像塔1基に文字塔4基のサイクルで連続して並べられていたと思われます。

百庚申以外には、5基の庚申塔、最古は享保7年（1722）銘の二童子と三猿がつく高さ98cmの青面金剛像塔。慶應3年銘（1867）の高さ145cmの文字塔は、百庚申造立の3年目の慶應3年の建立月日と同じで、また台石に33名の人名が刻まれていることなどから、百庚申完成供養を目的に建立されたと推定されます。

☆笠神の蘩波鷹（そばたか）神社の百庚申

笠神城の物見台跡と推定される尾根上に鎮座する蘇羽鷹神社境内には、享保18（1733）年「南無青面金剛尊」銘の庚申塔と、近代になって建立された百庚申が、狭い境内両脇に3群に分かれて整然と並んでいます。

百庚申は、駒型の「庚申塔」銘の文字塔54基と、青面金剛像塔6基の計60基で、右面には一部に建立年月日が、左面にはすべてに寄進者名が刻まれています。

- ・明治16年（1883）銘の文字塔5基と像塔1基の計6基
- ・明治33年（1900）銘の文字塔17と像塔2基の計19基
- ・昭和10年（1935）銘の像塔3基と、無年銘で文字塔（昭和10年建立と推定）30基の計33基

像塔と文字塔の配列は、明治16年の8基は中央に像塔を、明治33年の19基は両端に像塔を置き、昭和10年の30基は両端と中央付近に像塔を置いています。青面金剛像の像容は、笠神社の幕末期の百庚申の主尊の表情にみられる怒髪天を衝くような勢いはなく、衣文の表現も簡略化され、邪鬼もかろうじて存在しているばかりですが、明治以降の像容のある石仏は、一般的に子安像か地藏像ぐらいであり、近代の青面金剛像の像容例として極めて貴重です。

この百庚申の建立には三次にわたって52年間かかっており、近代に入って、笠神地区の三世代の人々により造塔が継続された事例は、他に類を見ないものです。また百庚申には40基足りませんが、60という数は干支の一周の数でもあり、また狭い境内に合わせた数であったと推測されます。

4. 一石百庚申について

「一石百庚申」とは、一石に「百庚申」などの銘がある単一の庚申塔で、北総では一石百庚申の数は11例（表2）と少ないですが、多石型に先立って主に文化文政年間に建立され、**印西市松崎火皇子神社の「庚申百社参詣供養塔」**銘は、百庚申信仰の由来を推定させる銘で**庚申塔百社の参詣成就を意味**し、北総の多石百庚申建立の理由がうかがえます。

また百体青面金剛塔や百書体庚申塔を簡略化した「百体庚申」銘のものや「百庚申」銘のみのものなどがあります。千葉県外での一石百庚申は、**群馬県倉淵**に一石に百体の青面金剛像を浮彫りした寛政6年銘（1792）「**百体青面金剛塔**」や、**長野県野底**に「奉請一百體庚申」の主銘の周りに、「庚申」の文字を百の異なった書体で表した安政七年銘（1860）の「**百書体庚申塔**」ほか、万延元年（1860）前後に群馬県・長野県・福島県などで「百書体庚申塔」が流行しています。

5. 「一石百庚申」の銘から探る「百庚申」造立の意図

北総の11例の一石百庚申を分析すると、①「庚申百箇度参」「庚申百社参詣」などの「参詣」型、②青面金剛百体や「庚申」百文字を刻む「百体」型、③「百庚申」銘型に分かれます。

① 参詣型一石百庚申

榎本正三氏は、柏市布施弁天の「**奉納百庚申百箇度参大願成就**」の銘と、印西市松崎・火皇子神社の「**庚申百社参詣供養塔**」の銘文に注目し、布施弁天の銘から寛政12年（1800）に**百体の庚申塔を巡拝する**という庚申信仰の**新分野の台頭**があり、その対応として、ムラ内での百体の庚申塔の建立が行われたと推論されています。このように百体の庚申塔を巡拝することを意味した一石百庚申は、「**奉参詣百社庚申塔**」銘の**八千代市桑橋**の事例にも見られます。

また、「百」の意味は、北総地方に根強い信仰のある百万遍念仏、百堂念仏、百観音巡礼など暮らしに息づく「百」の思想によるとし、**百庚申の成立は百庚申参りの成立**でもあり、それに伴って**10ヵ所の百庚申を巡拝することによる「千庚申」の成立**でもあったと述べています。

野田市内には寛政8年の「**奉拝千庚申為大願成就**」銘を初出として、「**千庚申**」9基と「**萬庚申**」1基の庚申巡拝塔が建立されていますが、このような千や万の庚申参詣も、多石百庚申の普及とその参詣によって可能となったのでしょう。

②百体型一石百庚申

一方、多摩石仏の会の石川博司氏は、一石百庚申が**群馬・栃木など北関東や多摩など武蔵地方に多い**こと、さらに一石に青面金剛像や、「青面金剛」・「庚申」の文字を100または多数刻んだ**一石百文字庚申塔**もあり、その群馬県の事例として縣敏夫著『**図説庚申塔**』に掲載の「**倉淵・百体青面金剛塔**」や、「**御霊神社・百書体庚申塔**」を紹介しておられます。

前者の倉淵・百体青面金剛塔は、寛政6年（1794）銘で、**青面金剛像を百体浮彫りした唯一の庚申塔**です。

縣氏によれば、この後の寛政9年には近隣の甘楽町に「**庚申**」文字を**100刻んだ塔**が初めて造立され、群馬県内に明治期まで70基ほどの一石百文字庚申塔が立てられるきっかけになったとのこと。

後者の万延元年（1860）銘の「**御霊神社・百書体庚申塔**」は、「**猿田彦大神**」の主銘の周りに、「**庚申**」の文字を**書家による百の異なる書体で刻んだ一石百書体の庚申塔**で、御霊神社にはこのような百書体庚申塔が9基もあります。幕末の群馬県では、一石百文字庚申塔が競い合うように普及、競うように凝った書体の百書体塔が造られたのでしょう。北総では、百字庚申塔は東庄町小貝野向地共同墓地に1基のみで、簡略型として**銚子市都波岐神社の「大青面金剛百体庚申」**銘塔、**八千代市麦丸台の「一百青面金剛王」**銘塔が、青面金剛百体を表す銘文と推定されます。

③「百庚申」銘型一石百庚申

北関東で「百庚申」といえば、自然石に単に「**百庚申**」と**だけ刻んだ一石百庚申**を指すほど一般的な事例です

が、北総では**匝瑳市高野**の一例のみでした。ほかに、**白井市復**の「奉納百庚申塔」、**野田市中里**との**東金野井**の「百庚申供養塔」**銘の百庚申塔**がありますが、これらを含め一石百庚申自体の数は意外と少ないといえます。

石塔数が多く迫力のある多石百庚申や、野田市の事例のような「千庚申」銘の方が、有難味があるように思われたためか、一石百庚申は、北総ではあまり普及しなかったのでしょう。

6. 最後に

多石百庚申は、百基並ぶ特異な景観から、印西市浦部や鎌ヶ谷市大仏の八幡神社のように、観光スポットとして注目される場合もありますが、一方、この時代の石塔がもろい軟質石材であることから、損傷して一部が失われ、後世の補修により改変されたものもあり、さらに我孫子市岡発戸の八幡神社のように 14 基のみ残してその残欠が多数積み上げられているものや、柏市高田の正徳寺のように一部が無縁塔に置かれているものなど、もはや原形すらとどめない百庚申もあります。

また道路拡張や市街地化により移転を余儀なくされ、松戸市大谷口の神明神社の場合は二か所の百庚申を一か所に移転、また印西市松虫では半数ずつ二か所に分けて移転されていました。

印西市武西の百庚申は、その景観のすばらしさもあって印西市の指定文化財として大切にされてきましたが、近年の大規模な都市開発により、大型の公園の片隅にフェンスで囲まれて立ち入りもできない状態になり、周りの環境の変貌に往時の姿を失いつつあります。

百庚申は、柏市布瀬路傍の百庚申のようにムラ往還に列をなして並ぶ姿にこそ、民間信仰を物語る文化財としての価値があり、その調査と共に保存のあり方も問われている現状でもあります。

船橋市前原東の庚申塚百庚申は、多石百庚申エリアの最南西の端、しかも街道路沿いの街中に位置する貴重な百庚申です。大塚武彦氏ほか、正伯塾の地元の皆さまの調査研究によって、地域の文化財としてその姿と意義が後世に伝えられていくように願っています。

スライドで紹介する石塔

近世庚申塔の関東での初出： 足立区正覚院 弥陀三尊来迎塔 元和 9 年 (1623) ・三郷市常楽寺 山王廿一社文字塔 元和 9 年 (1623) ・松戸市幸谷観音 山王廿一社文字塔 寛永 2 年 (1625)

船橋近辺の庚申塔 I 初期の三猿像を刻む庚申塔： 八千代市高本八幡神社 万治 3 年 (1660) ・鈴見町墓地 寛文 4 年 (1664) ・古作町明王院 延宝 7 年 (1679) **II 初期の如来・菩薩像を刻む庚申塔**： 佐倉市先崎 慶安 3 年 (1650) 地藏菩薩像 ・葛飾本郷路傍 薬師如来像 寛文 10 年 (1670) ・大神保町路傍 釈迦如来像 延宝 4 年 (1676) **III~V 青面金剛像を刻む庚申塔**： 印西市砂田庚申堂内 寛文 11 年 (1671) ・佐倉市下志津原路傍 延宝 4 年 (1676) ・八木ヶ谷王子神社 元禄 2 年 (1689) ・印内八坂神社 元禄 11 年 (1698) ・古和釜東光寺 宝永 2 年 (1705) ・東町不動院 宝永 6 年 (1709) ・葛飾本郷路傍 享保 20 年 (1735) ・高根町神明社 宝暦 7 年 (1757) ・高根町神明社 宝暦 7 年 (1757) ・本町 3 丁目覚王寺 安永 5 年 (1776) **VI 文字と三猿の庚申塔**： 印内路傍「青面金剛」銘 文化 11 年 (1814) ・高根町神明社「庚申塔」銘

前原東五丁目の百庚申が並ぶ風景： 青面金剛像庚申塔 ・享保 18 年 (1733) ・延享 4 年 (1747) ・享保 19 年 (1734) ・文字庚申塔 天保 5 年 (1834) ・二十三夜塔 文政 10 年 (1828) ・文字庚申塔 天保 2 年 (1831) ・無年号の「百庚申」塔約 70 基

北総の百庚申探訪 I~VIII： 柏市布瀬路傍の百庚申 文政 7 年 (1824)~明治 8 年 (1875) ・印西市浦部の百庚申 天保 10 年 (1839) ・鎌ヶ谷市大仏八幡神社の百庚申 天保 12~天保 13 (1841~1842) ・印西市武西の百庚申 武西学園台 3 丁目 文久 3 年 (1863) ・印西市砂田の百庚申 小林・猿田彦神社 天保 6 年 (1832)~明治元年 (1866) ・栄町上町の百庚申 慶応 2 年 (1866) ・印西市松虫の百庚申 文政 12 年 (1829) ・印西市笠神笠神社の百庚申 慶應元~3 年 (1865~7) ・印西市笠神蘆波鷹神社の百庚申 明治 16~昭和 10 年 (1883~1935) **IX 自然石の百庚申**： 流山市東福寺の自然石百庚申 ・匝瑳市大浦・路傍の飯岡石の百庚申 ・東庄町宇賀神社飯岡石の百庚申 **X 一石百庚申**： 印西市松崎火皇子神社「庚申百社参詣供養塔」銘文化 13 年 (1816) ・八千代市麦丸台・庚申塚「一百青面金剛王」銘 文化 12 年 (1815)

千葉県外の百体型一石百庚申： 群馬県倉渚百体青面金剛塔 寛政六年銘 (1792) ・長野県野底 「奉請一百體庚申」百書体庚申塔 安政 7 年 (1860) ・群馬県総社町御霊神社「猿田彦大神」百書体庚申塔 万延元年 (1860)

表 1 北総の多石百庚申 一覧表

No.	所在地	造塔年	西暦	像塔	文字塔	形状	文字塔銘文
1	銚子市・都波岐神社				200以上	駒型	庚申
2	旭市東足洗	天保6～元治元	1835～1864		100	駒型	庚申塔
3	東庄町笹川い大木戸・庚申塚	弘化4年	1847		61	自然石	大青面金剛・庚申
4	東庄町平山法木作・庚申塚	弘化5年	1848		不明	自然石	青面金剛王
5	東庄町舟戸作ノ内・左右神社	不明			42	自然石	庚申塔
6	東庄町神田花香・宇賀神社	天保6	1835		101	自然石	青面金剛・庚申
7	東庄町粟野宿・庚申塚	天保15	1844		多数	自然石	青面金剛・庚申
8	東庄町青馬・庚申塚	江戸末期			98	自然石	青面金剛・庚申
9	匝瑳市大寺	不明			多数	自然石	
10	匝瑳市大浦・路傍	不明			多数	自然石	庚申
11	香取市米野井・戸田神社				多数	自然石	
12	香取市増田・村山	不明			42	駒型	青面金剛王
13	香取市北原地新田・稻荷神社	安政7	1860		多数	二連駒型等	庚申
14	成田市竜台・路傍	寛政12～安政6	1800～1859	14	85	駒型	庚申塔・青面金剛尊他
15	成田市宝田桜谷津(R408傍)	明和元～明治40	1764～1907		70前後	七連駒型等	庚申塔
16	成田市宝田後(R408傍)	文久2	1862	4	21	駒型	庚申塔
17	成田市西和泉	不明		5	22	駒型	庚心塔ノ孝心塔ノ庚申塔ノ青面金剛
18	栄町上町・路傍	慶応2	1866	10	81	駒型	庚申塔
19	印西市笠神・笠神社	慶応元～慶応3	1865～1867	18	82	駒型	庚申塔
20	印西市笠神・蘇羽鷹神社	明治16～昭和10	1883～1935	6	54	駒型	庚申塔
21	印西市松虫・路傍(2か所)	文政12	1829	100		駒型	
22	印西市小林・猿彦神社	天保6～明治元	1835～1864		98	駒型	庚申塔
23	印西市武西・路傍	文久3	1863	10	90	駒型	庚申塔
24	印西市浦部・路傍	天保10	1839	10	90	駒型	庚申塔
25	我孫子市高野山・香取神社	天保15年～嘉永5	1844～1852	9	91	駒型	庚申塔
26	我孫子市岡発戸・八幡神社	弘化4～安政5	1847～1858	1	17	駒型	庚申塔
27	我孫子市緑二丁目・大光寺	天保13～嘉永元	1842～1848		37	駒型	庚申塔
28	柏市布瀬・路傍	文政7～明治8	1824～1875	9	94	駒型	庚申塔
29	柏市布施・布施弁天	江戸後期		6	40	駒型	庚申塔
30	柏市柏・諏訪神社	天保3～嘉永6	1832～1853	10	80	駒型	青面金剛
31	柏市名戸ヶ谷・香取神社	天保6～元治元	1835～1864	10	86	駒型	青面金剛・庚申塔
32	柏市南増尾283	天保7～昭和12	1836～1937	5	95	駒型	青面金剛ノ百体庚申大願成就
33	柏市松ヶ崎・香取神社	天保12～弘化5	1841～1848	4	88	駒型	青面金剛
34	柏市高田・正徳寺	天保12～万延元	1841～1860	5	9	駒型	庚申
35	野田市西三ヶ尾・香取神社	天保9	1838		68	駒型	庚申・百庚申供養塔
36	野田市下三ヶ尾 駒形香取神社	天保11	1840		数十	駒型	庚申・百庚申供養塔
37	流山市鱧ヶ崎・東福寺	江戸後期			97	自然石型	庚申
38	流山市前平井・旧東栄寺				55		
39	松戸市大谷口・神明神社	安政7	1860		197	駒型	庚申塔
40	鎌ヶ谷市大仏・八幡神社	天保12～天保13	1841～1842	10	90	駒型	庚申塔
41	船橋市前原東5丁目・庚申塚	不明			70	駒型	庚申塔

表 2 北総の一石百庚申 一覧表

No.	所在地	造塔年	西暦	形状	銘文
1	柏市布施・布施弁天	寛政12年	1800	角柱型	奉納百庚申百箇度参大願成就
2	八千代市桑橋 字作ヶ谷津	文化9	1812	駒型	奉参詣百社庚申塔
3	八千代市麦丸台・庚申塚	文化12	1815	駒型	一百青面金剛王
4	印西市松崎・火皇子神社	文化13年	1816	駒型	庚申百社参詣供養塔
5	白井市復・八幡神社	文化13年	1816	駒型	奉納百庚申塔
6	印西市松崎・山の下庚申塚	文政4年	1821	駒型	青面金剛尊ノ百庚申
7	東庄町小貝野向地・共同墓地	文政9年	1826	角柱型	大青面金剛ノ庚申(100字)
8	野田市中里・西岸寺境内	文政13	1830	兜巾型	百庚申供養
9	野田市東金野井	嘉永7	1854	角柱型	百庚申供養塔
10	匝瑳市高野 笹曾根コミュニティセ	万延元	1860	自然石	百村 百庚申
11	銚子市・都波岐神社	慶応元年	1865	駒型	大青面金剛百体庚申